

受付No.

2026年度 アートによる地域振興助成（スタートアップ）

公益財団法人 福武財団 理事長 福武英明殿
募集要項に則り、本応募用紙に記載した通り、標記助成に応募いたします。

<団体プロフィール>

団体名	炭鉄港推進協議会				
住所	〒068-8558 北海道岩見沢市八条西5丁目				
団体区分	任意団体	スタッフ数	10名		
代表者氏名(カナ)	サクライヒサシ	役職	会長	年代	40代前半
代表者氏名	桜井 恒				
団体URL1	https://3city.net/				
団体URL2	https://www.youtube.com/@tantetsukou				

<申請者・実務担当者> ※団体所在地と同じ場合は「同上」*申請者には、助成に関する諸手続きの連絡担当者の名前を記入してください。

申請者氏名(カナ)	トウドウシホ	役職	事務局員	年代	30代前半
申請者氏名	藤堂 志保				
連絡先 e-mail	toudou.shiho@pref.hokkaido.lg.jp	電話番号	0126-20-0034		
住所(書類の送付先)	同上				

<プロジェクトリーダーの略歴> ※アートプロジェクト等の運営経験や当時の役割を記載してください。

氏名(カナ)	トウドウシホ	役職/肩書	事務局員	年代	30代前半
氏名	藤堂 志保				
年(西暦) 月	略歴(活動内容)				
2024年4月	炭鉄港関連事業の従事開始				
2024年9月	炭鉄港アートプロジェクト2024の運営				
2025年9月	炭鉄港アートプロジェクト2025の運営				

<福武財団の助成実績>

助成を受けて活動した年度
2025年度

<外部協力者の状況>

氏名	年代	組織名	所在地(市町村まで)	協力内容(できるだけ具体的に)
CAI現代芸術研究所(端 聡、佐野 由美子)	60代前半	CAI現代芸術研究所	北海道札幌市	本プロジェクトの立ち上げに尽力し、2024・2025両年度の炭鉄港アートプロジェクト運営と調整に協力。
NPO法人炭鉄の記憶推進事業団(理事長: 平野 義文)	50代前半	NPO法人炭鉄の記憶推進事業団	北海道岩見沢市	炭鉄港や炭鉄の記憶を伝える活動をしている地域の活動団体。会期中のガイドツアー開催やボランティアの呼びかけ、周知等で協力。
NPO法人歴史文化研究所(美濃 進)	60代後半	NPO法人歴史文化研究所	北海道小樽市	小樽の歴史や観光人材の育成をしている地域の活動団体。会期中のガイドツアー開催やボランティアの呼びかけ、周知等で協力。
小樽商科大学(高野 宏康[歴史民俗資料学博士])	50代前半	小樽商科大学	北海道小樽市	小樽市日本遺産地域プロデューサー。学生との連携した取り組みに協力。会場と炭鉄港の歴史的な繋がりを監修。
一般社団法人OTARU CREATIVE PLUS(専務理事 福島 慶介)	40代後半	一般社団法人OTARU CREATIVE PLUS	北海道小樽市	過去に旧手宮線インスタレーション、第3倉庫ライトアップ等を実施しており、北海製罐第3倉庫の活用などアドバイザーとして協力。

<活動内容・事業計画について>

表現手法	地域型芸術祭
活動テーマ	郊外（の地域振興）
事業名	炭鉄港アートプロジェクト2026
2026年度の活動期間	2026/08/01 ～ 2026/10/31
活動に従事するスタッフ数	5名

1. 団体の活動の概要

<p>2019年に文化庁から日本遺産に認定された「炭鉄港」を通じて地域活性化を図ることを目的として立ち上げられた団体で、これまで補助金や負担金を活用し、ガイド養成事業、普及啓発フォーラム、教育旅行事業、サイクリング事業、小中学生等と対象とした出前講座、小学生向け副読本の制作など、多岐に渡る事業を実施してきました。地域内のシビックプライドの醸成、そして地域外の人々への魅力発信・誘客促進の両輪で活動し、「炭鉄港」の活用と地域振興に成果を出してきました。2024年に、小規模ながら炭鉄港アートプロジェクトを岩見沢市で初開催し、直近では貴財団の助成を受け炭鉄港アートプロジェクト2025を赤平市で開催しました。</p>

2. これまでの活動の沿革

申請事業の活動年数	7～10年
年（西暦） 月	活動内容
2018年7月	団体設立
2019年5月	本格的な活動開始。2019年度はガイド養成、普及啓発フォーラム、小学生向け副読本制作などを実施。
2020年4月	2020年度は食文化を通じたPR、歴史資料のアーカイブ構築、労働者・生活者の証言を残す映像制作などを実施。
2021年4月	2021年度は担い手育成、次世代伝承、地域イベント、他県の日本遺産との連携、ガイド養成などを実施。
2022年4月	2022年度はガイド付きツアー、食文化を活かした普及啓発、炭鉄港カード配布などを実施。
2023年4月	2023年度はARを使った体験コンテンツ造成、交通事業者との連携、大学生との連携、多言語整備などを実施。
2024年4月	2024年度はJRとの連携、地域活性化戦略の策定、サイクリングツアーガイドの養成、深掘り調査などを実施。
2025年4月	2025年度は地域周遊イベントの開催、アートプロジェクト、SL記念事業などを実施中。

3. 活動エリアについて

活動エリア	北海道 小樽市、室蘭市、夕張市、岩見沢市、美瑛市、芦別市、江別市、赤平市、三笠市、歌志内市、上砂川町、栗山町、月形町、沼田町、安平町
活動エリアの特色（歴史、文化、地域性、魅力など）	15市町からなる炭鉄港エリアは、空知の炭鉱、室蘭の鉄鋼、小樽の港湾、それらを繋ぐ鉄道を舞台に繰り広げられた歴史ストーリーの舞台です。炭鉱遺産や鉄道施設などが今も歴史をたどる文化財や遺産として存在し、訪れる人に北海道のまだ見ぬ魅力を語っています。国策で石炭採掘が始まり、そしてまた国策によりその役目を終えた炭鉄港エリアでは、最盛期から大幅に人口が減り、特に空知ではピークに82万人が28万人に、また小樽でも20万人から11万人へと半減しました。日本全体の喫緊の課題である過疎化や人口減少に関して、すでに起きた未来である炭鉄港の足跡を辿ることは、日本の将来を考える上でも非常に意義のあることと言えます。
活動エリアの課題（まず初めに、活動エリアにおける課題を簡潔にご記載ください。続けて、その課題の背景や詳細について、できるだけ具体的にご記入ください。）	炭鉄港エリアの人口は激減しており、高齢化が進み、生活機能の維持すら難しくなりつつある地域もあります。かつては人や石炭を運び、北海道だけでなく日本の発展にとって必要不可欠であった鉄道も、今では利用者が減り廃線が相次いでいます。また、炭鉱遺産は事故や強制労働などの負の記憶とも結びついていることや、一部の市民にとっては「炭鉱がつぶれたせいでまちが衰退した」という記憶も色濃くあり、「役割を失ったネガティブな遺産」と捉えられている面もあります。炭鉱に限らず、港湾や工場などの産業遺産が良い保存状態で残されているにも関わらず、保全に向けては大きな負担を伴うことから市民の意見は賛否両論というのが現状です。
貴団体の地域に対するミッション（活動の目的）	当協議会は日本遺産「炭鉄港」の歴史ストーリーを活用して、炭鉄港地域に住む人々が誇りを持って住み続けられる持続可能な地域づくりを目指し、関係自治体からの負担金や補助金を主な原資として活動しています。私たちが掲げてきた「<すでに起きた未来>としての地域」から「あるモノで、ないコトを創る」というコンセプトは、貴団体の掲げる「日本の近代化の流れの中で行われていた破壊と創造の繰り返しを見直し、『在るものを活かし、無いものを創る』」という信条と、まさに合致すると考えます。こうした視座に立ち、地域が人口の取り合いをするのではなく、それぞれ幸せに生きられる地域になることを目指して地域振興活動を続けています。

7. 2026年度プロジェクト評価の観点や指標をどのように設定しますか。

定性（状態的な目標）、定量（数値的目標）をお書きください。

定性的な目標：小樽市は北海道を代表する観光都市として多くの来訪者を集めている一方で、日本遺産「炭鉄港」が示す歴史的背景まで理解する地域住民や観光客は多くありません。特に、日本遺産「炭鉄港」の構成文化財である手宮線跡地は地域住民や観光客にとって馴染み深い場所ですが、同じく構成文化財である旧手宮鉄道施設のうち、今回作品展示を行う貯水槽・危険品庫はあまり知られておらず、活用もされていません。本プロジェクトでは、これらの施設を活用したアート展示で、北海道近代化の歩みを体感的に伝えることで、地域の歴史資源への理解を深める契機とします。あわせて、市民の誇りや地域への愛着を高め、シビックプライドの醸成と文化遺産の継承につなげることを目指します。

定量的な目標：会期中に開催するライブパフォーマンスのイベントに100名が来場することを目標とします。また、会期中を通して合計で2,000人の動員を目指します。

8. 2026年度の翌年以降の、地域に持続的に関わる中期計画と将来ビジョンをお書きください。

※一般申請者は、その計画・ビジョンの展開がこれまでの活動の積み重なりによりどのように紐づいているかと、その展開に事業や運営体制をどのように反映していくかについてもお書きください。

本プロジェクトは、2004年から開催されていた「そらち・炭鉱の記憶アートプロジェクト」の系譜を引き継ぐものです。2024年には、その流れを途絶えさせないため「炭鉄港アートプロジェクト2024」と題し、鉄道の要衝である岩見沢市で小規模ながら2点の作品を公共空間に展示し、翌2025年には、炭鉱の雰囲気は今も色濃く残る赤平市の炭鉱遺産にて、4つの作品展示やライブパフォーマンス、シンポジウム、ワークショップを実施しました。

今回申請する「炭鉄港アートプロジェクト2026」では、赤平（空知）で採掘された石炭が、岩見沢を経て鉄道で小樽港から全国へ積み出されたという、日本遺産「炭鉄港」のストーリーをアートで繋ぎます。2026年以降は、もう一つの積出港であり、石炭によって製鉄業で栄えた室蘭市へと展開し、その後も炭鉄港地域内で会場を移しながら、ビエンナーレ形式で継続開催していく計画です。

また、これまでの「そらち・炭鉱の記憶アートプロジェクト」や「炭鉄港アートプロジェクト2024・2025」の活動を来場者に伝える仕組みを整え、各年度の活動が独立したものではなく、連続性と物語性をもった一連のプロジェクトとして位置づけます。それにより、炭鉄港地域内の横のつながりを強め、まちのストーリーを行政区域を越えて面的に広げていきます。

将来的には、地元企業からの協賛やチケット・グッズ販売などにより、助成金に依存しない持続可能な運営体制を確立することを目指します。

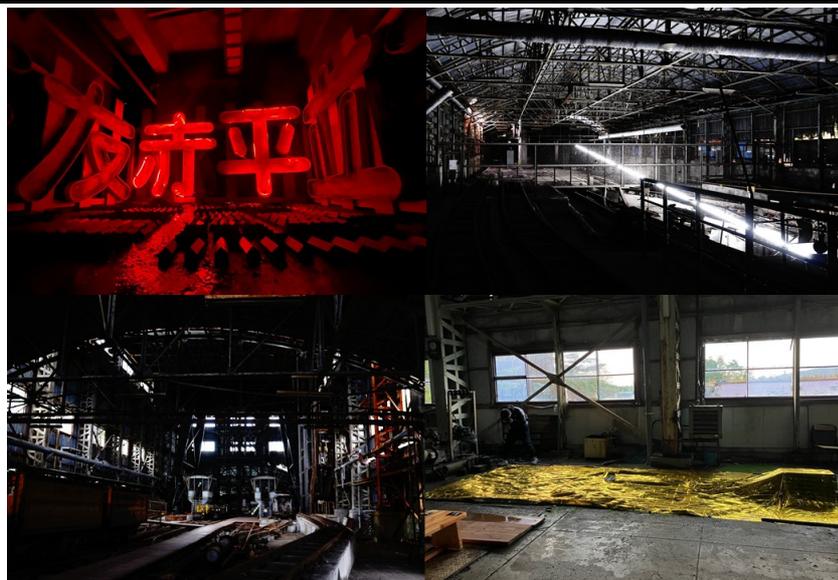
9. 2026年度以降、複数年の助成を希望していますか？

はい

<活動の様子>



2024年度に小樽のガイド団体と炭鉄港ガイドツアーを開催したときの様子



「炭鉄港アートプロジェクト2025」展示作品4点



「炭鉄港アートプロジェクト2025」ライブパフォーマンスを行ったときの様子

